岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社

令和４年３月

一関市教育委員会

序

一関市厳美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺経蔵別当領であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されており、平成17年には国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定、平成18年には国重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、平成23年６月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、平成24年度に世界遺産暫定一覧表に登載されており、一関市教育委員会では継続して調査研究を行っています。

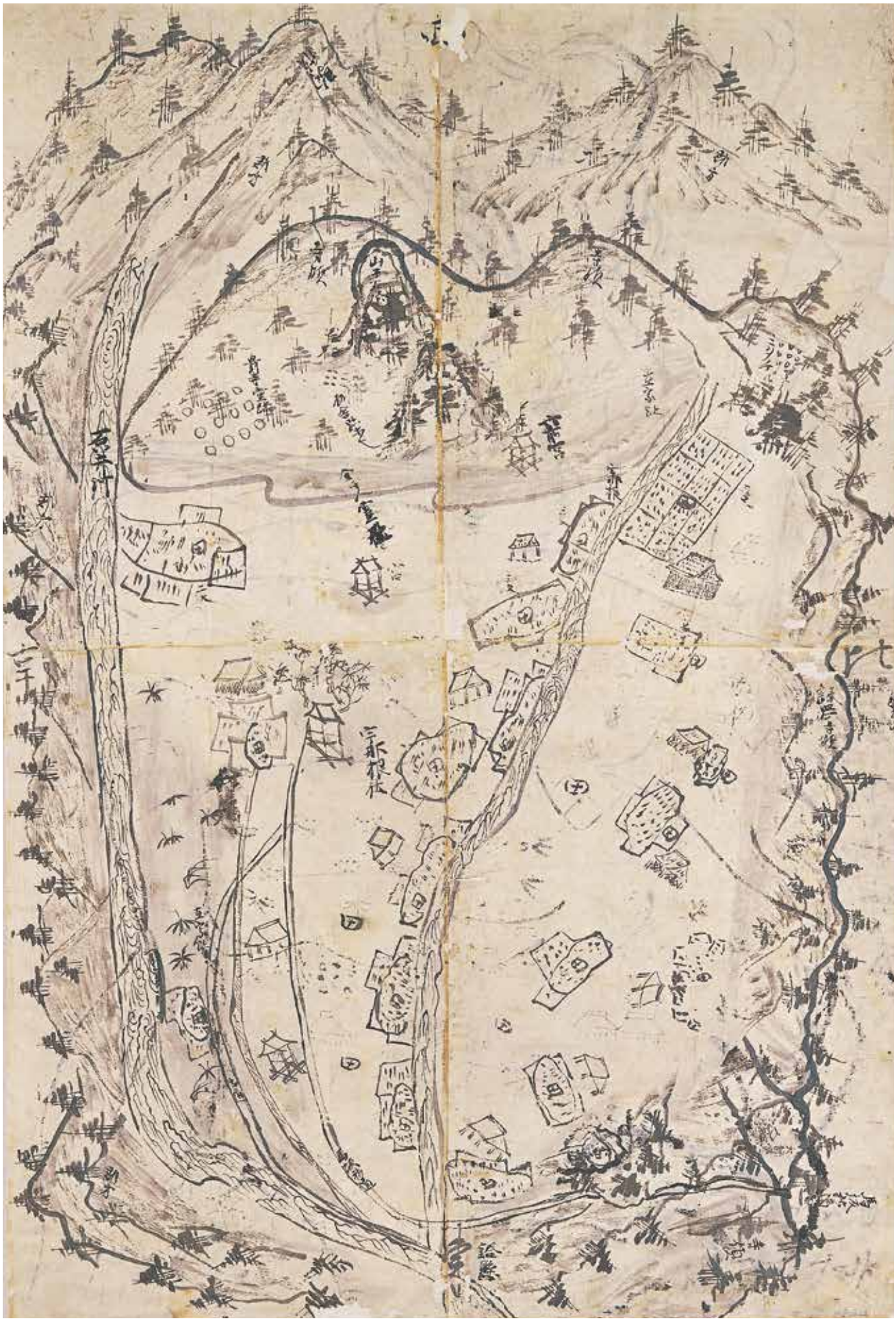
本年度は、国指定史跡骨寺村荘園遺跡のうち、白山社及び駒形根神社の一部で確認調査を実施し、その成果を本報告書にまとめました。本報告書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々に衷心より感謝を申し上げ、本報告書発行のあいさつといたします。

令和４年３月

一関市教育委員会

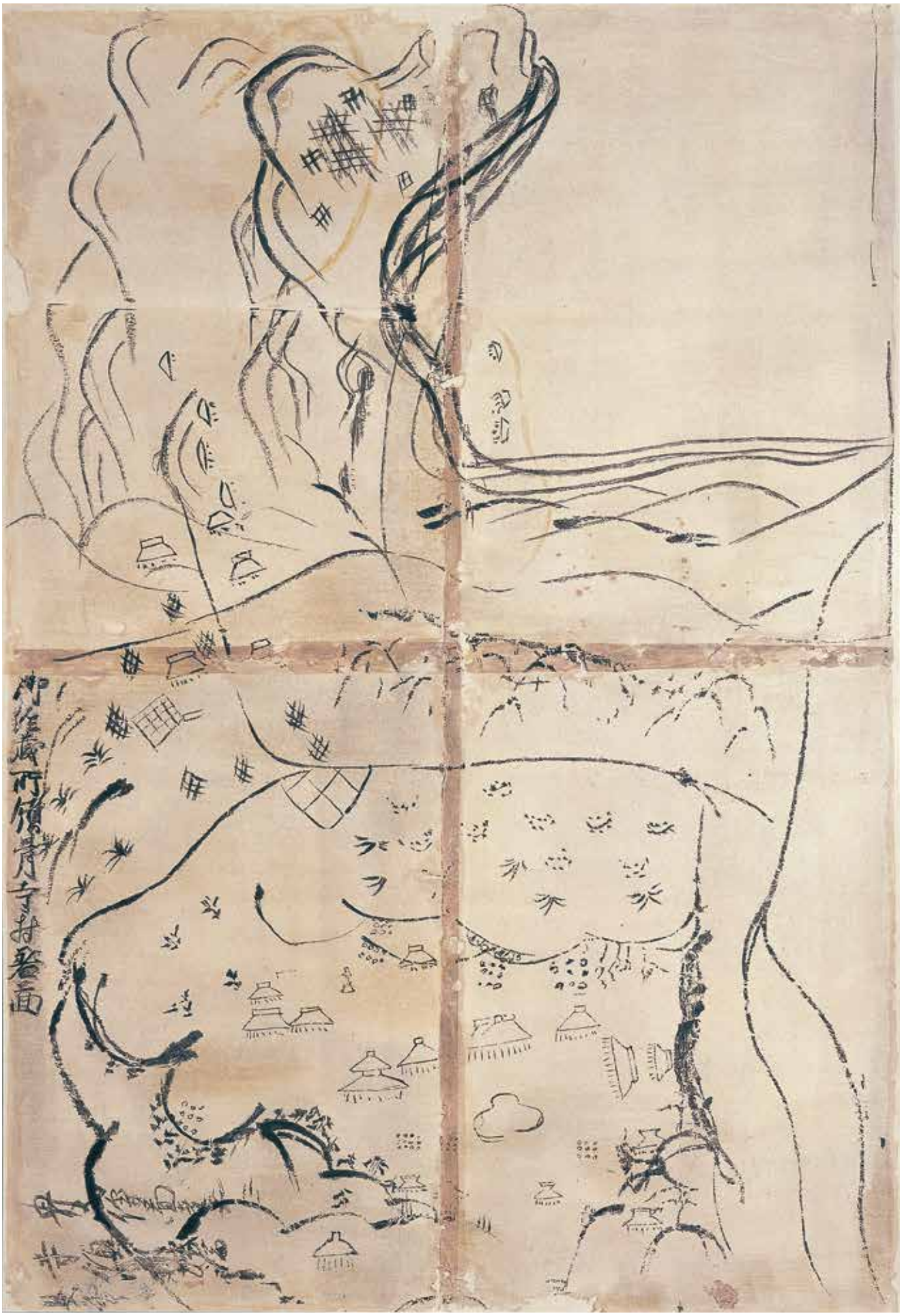
教育長　　**小　菅　正　晴**



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図（複製）　原典は中尊寺蔵

カラー図版２

国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製）　原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図（複製）　原典は中尊寺蔵

駒形1-1地点遠景（矢印直下が調査区、東から、無人航空機による空中撮影）

駒形1-1地点調査区全景（直上から、無人航空機による空中撮影）

例　　言

１．本書は、岩手県一関市教育委員会が令和３年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。

２．調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。

３．調査は、平成７年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市厳美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容の確認のための発掘調査を実施したものである。

４．令和３年度調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「白山社及び駒形根神社」の範囲内の駒形１－１地点である。

５．調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。

６．調査体制は以下のとおり。

教育委員会　文化財課	課長	千葉　浩
	文化財係長	金野　修
	主任学芸員	菅原孝明
	文化財調査研究員	光井文行
		阿部　充
	会計年度任用職員	小岩誠也

７．本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は光井が行った。

８．本書図３に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。
（許可番号　令和４年２月15日総第11012号）

９．土層断面図の土色表示は新版標準土色帳1997年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。

10. 調査に係る無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は川嶋印刷株式会社に、調査補助及び調査区刈り払い業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、それぞれ委託した。

11. 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。

12. 調査協力者・機関（敬称略・50音順）
阿部勝則、及川幸子、小形栄一、小岩寿男、小巌芳夫、佐々木源輔、佐々木登志也、佐々木光昭、佐藤勲、佐藤金朗、佐藤健爾、佐藤弘征、佐藤征男、佐藤光雄、二階堂孝子、平山勇、山川純一
岩手県教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、文化庁、骨寺村ガイダンス運営協議会、本寺地区地域づくり推進協議会

目　　次

序…… 1

カラー図版…… 3

例言…… 7

目次…… 8

１　位置と環境…… 9

２　調査に至る経緯…… 14

３　駒形１－１地点の調査　…… 21

４　総括…… 38

遺物観察表…… 39

写真図版…… 40

1　位置と環境

（1）一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年（2005）9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の７市町村が合併、さらに23年（2011）9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42㎢である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」（昭和43年《1968》）や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年）および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年《2006》）、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ渓谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「厳美渓」（昭和2年《1927》）がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「猊鼻渓」（大正14年《1925》）がある。

（2）骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市厳美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海抜高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海抜230m～260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班（総括：広田純一《岩手大学教授》）による一連の研究成果がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の厳美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底（縦方向）と河岸（横方向）への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、厳美層が交互に出現する理由は、断層活動により厳美層に褶曲が生じているためであるという（土井2012）。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している（島田2012）。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田ａ火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物（オモダカ・サジオモダカ属）の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサやソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている（平塚他2012）。ただし十和田ａ火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。

（3）歴史的環境

中尊寺文書　骨寺村の中尊寺荘園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光という僧侶が、紺紙金銀字交書一切経を奉行し、８年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する譲状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保２年《1318》３月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

吾妻鏡　文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮は所領の安堵を求めるため、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院(とばいん)の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈祷料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鎰懸、西は山王窟、南は磐井川、北は峯山堂（から）馬坂である。

陸奥国骨寺村絵図　中尊寺大長寿院には２枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版１）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版２）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版３）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領□□境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

磐井郡西岩井村絵図（元禄十二年《1699》）　磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串村の中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

平泉雑記（安永二年《1773》）　平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

風土記御用書出（安永四年《1775》）　仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名　若神子」、「山王社、小名　山王山」、「不動窟、小名　真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である「関山風土記」には、慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

（4）骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。21年度調査で逆茂木が残る陥穴を、22・23年度で楕円形の陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の竪穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期から弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの土師器や須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器埦や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、どうやらこのあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。遠西遺跡からは、12世紀の常滑窯産三筋壷と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。大堀相馬窯産の土瓶や瀬戸窯産の燈明具など近世以降の遺物が出土している。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定

が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

（一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「１.位置と環境」を引用、加筆）

若神子社と田植えを終えた水田

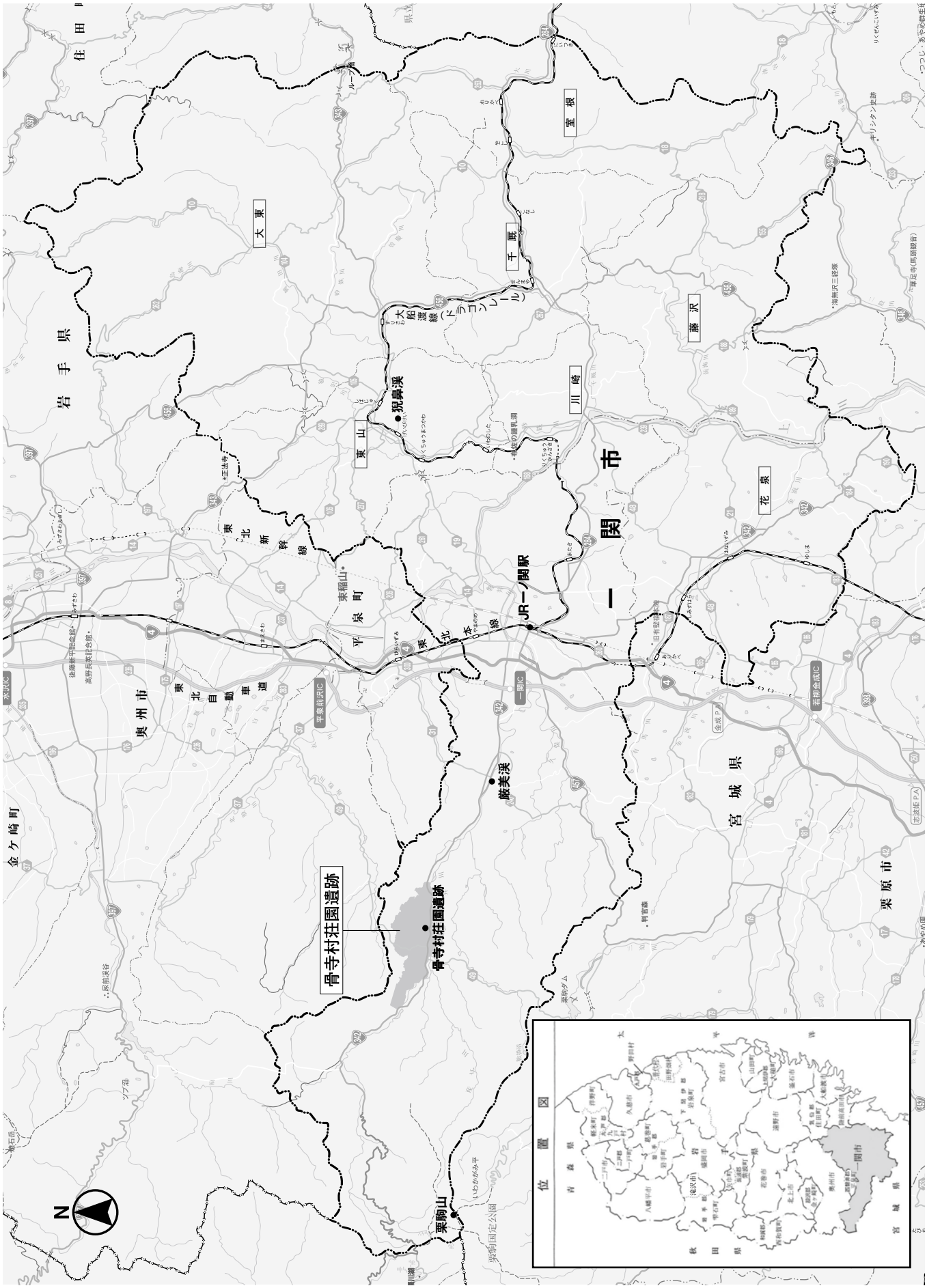


図１　骨寺村荘園遺跡位置図

2　調査に至る経緯

（1）骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成５年２月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成７年４月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成７年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成８～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1／2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討
平成13年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年６月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年８月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年３月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全･活用、世界遺産登録に向け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年３月２日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される　文部科学省告示第22号 （山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂（拝殿））
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年７月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内２番目の重要文化的景観に選定　文部科学省告示第121号
平成18年９月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉―浄土世界を基調とする文化的景観」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年８月26～30日	イコモス現地調査
平成20年５月	イコモス「登録延期」を勧告
平成20年６月14日	岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7.2）発生。震源地は本寺地区の西方約３km

平成20年７月	世界遺産委員会で「平泉―浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188番外地点）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、９世紀代の須恵器と土師器出土
平成21年４月４日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥舘遺跡、達谷窟の４資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年１月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量の実施、近世地誌類や出土遺物、石造物の整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年９月８・９日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年３月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴確認
平成23年５月	イコモス「登録」を勧告
平成23年６月29日	世界遺産委員会で「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定　但し、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第１回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成24年３月22日	第２回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴、十和田ａ火山灰確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年５月18日	第３回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成24年９月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議　開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年１月30日	第４回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に３基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川６地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗片出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会　開催
平成26年１月７日	第５回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川４、６地点）確認調査、中川４地点の塚の自然

	科学分析を実施、13世紀後半と推定
	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会　開催
平成27年１月６日	第６回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成27年１月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定　文部科学省告示第６号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川６地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け
	梅木田遺跡確認調査、17世紀以降掘立柱建物確認
	平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会　開催
平成28年１月５日	第７回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認
	白山社及び駒形根神社（駒形５、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡確認
	平泉野遺跡（中川９、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝確認、塚の構築年代を16世紀遺構と結論付け
	山王窟三次元測量
平成28年８月４～６日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会　開催（第８回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月３日	第９回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成28年12月３・４日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会　開催
平成29年１月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川９、若井原194-1地点）確認調査、側溝とみられる溝２条、竪穴状遺構確認
平成29年６月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成29年８月５日	「平泉の文化遺産」国際会議　開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年８月６日	第２回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年９月８日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成30年３月７日	第14回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
平成30年度	平泉野遺跡（中川９、若井原194-1、194-2地点）確認調査、竪穴状遺構、フラスコ状土坑確認
	駒形45-4地点確認調査、柱穴、土坑確認
平成31年３月23日	第15回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催
令和元年度	駒形45-4地点確認調査、遺構は発見されず、自然科学分析を実施し縄文時代と推定
令和２年度	駒形4-1地点確認調査　土坑確認
令和３年３月12日	第16回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催

令和３年度　　駒形1-1地点確認調査
令和３年９月19日　　骨寺村荘園遺跡研究集会　開催
令和４年１月６日　　第17回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会　開催

（2）令和３年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成８年度から骨寺村荘園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区で、絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。そのことは、遺構の時代も中世まで遡ることを示唆している。一方、宗教施設の調査については、中世に遡る遺構・遺物の発見には至っていない。村落遺跡としての把握は進んでいるものの、宗教施設の調査では明確な成果を挙げられていないのが現状である。

市教育委員会は、15年から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして、世界文化遺産への登録を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となったため、21年に登録推進の資産候補の絞り込みが提案された。そして、骨寺村荘園遺跡は更なる調査研究が必要と判断され、資産候補から外れ拡張登録を目指すことになったのである。

そのため、市教育委員会は７カ年の発掘調査計画を立て、特に宗教施設に関わる調査を中心に実施してきた。そうした中、23年に「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村荘園遺跡のほか、柳之御所遺跡（平泉町）、達谷窟（平泉町）、白鳥舘遺跡（奥州市）、長者ヶ原廃寺跡（奥州市）の５つの拡張予定資産が、世界遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係県市町間で25～29年度の５カ年で重点調査を実施することを確認した。この重点調査で成果を積み重ねたが、拡張登録につながる顕著な普遍的価値の証明に至らないとの結論に達し、関係県市町で30年度以降も調査を継続することで合意した。

令和３年度は、平成21年度からの発掘調査計画を改定した第２期計画（平成29～令和３年度）の５年目（最終年度）にあたる。また、上記のとおり関係県市町で拡張登録を目指す各資産で調査を継続することを取り決めていること、令和元年度の踏査により、平泉野台地の南端部で平坦面を２か所確認したため、そのうちの東側（字駒形１－１地点）の調査を実施した。

これまで（平成11～令和３年度）調査した地点を図２-１、図２-２、表１に示した。

（一関市教育委員会2021『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「２　調査に至る経緯」を引用、加筆）
（菅原）

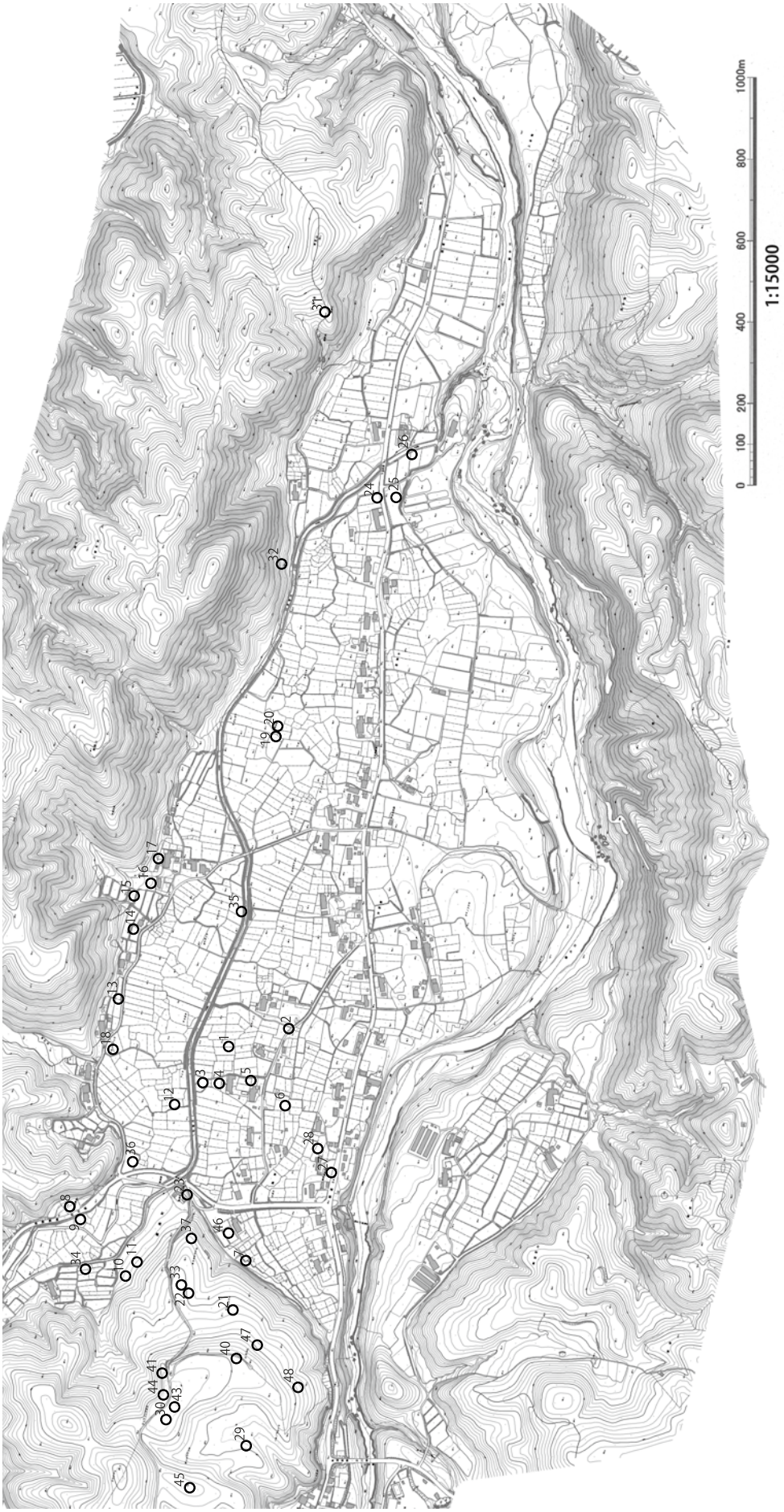


図２-１　骨寺村荘園遺跡における既調査地点（１）

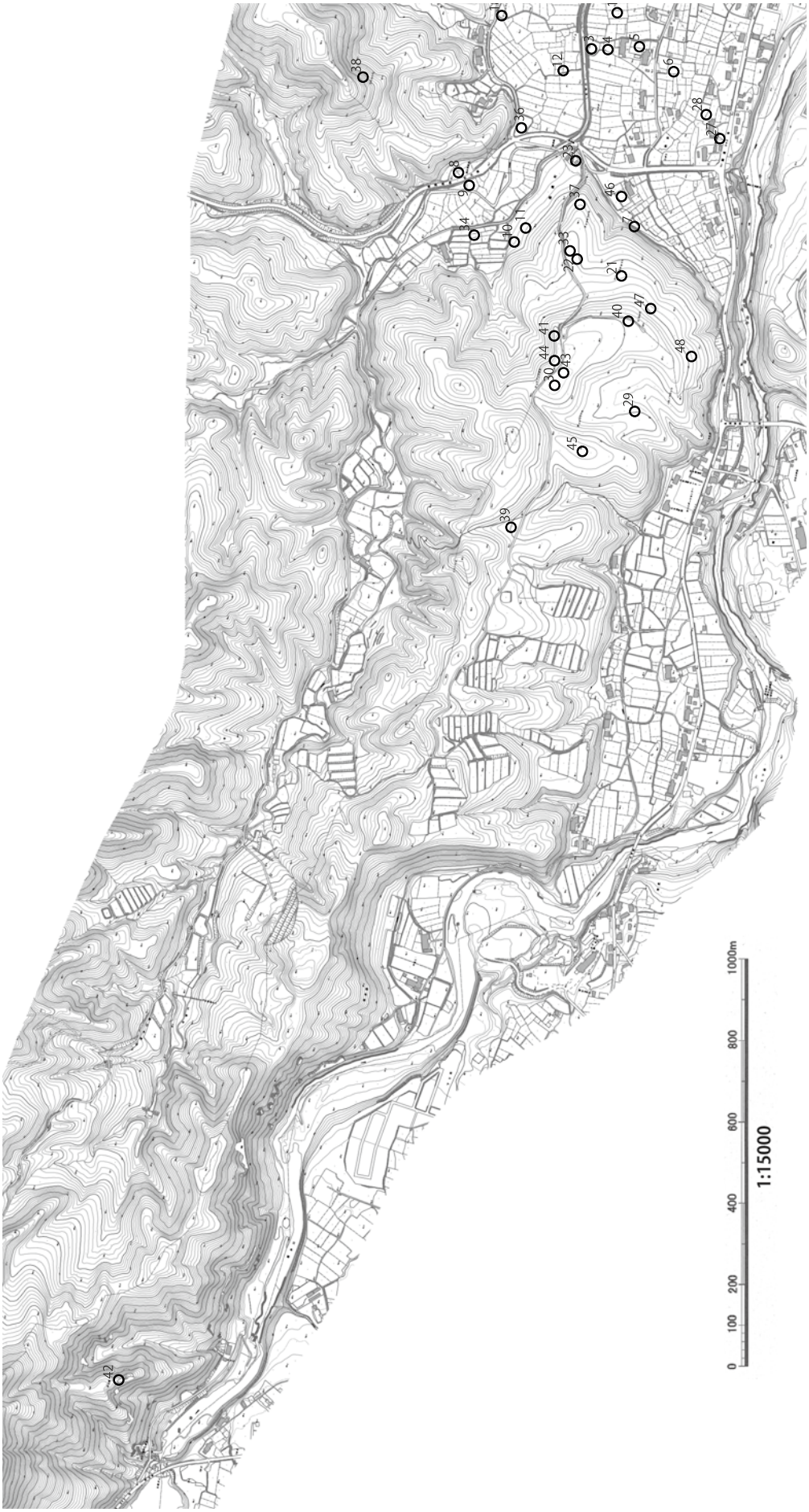


図２-２　骨寺村荘園遺跡における既調査地点（２）

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、銭	平成18年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	落とし穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、慈恵塚	近世陶磁器、近世銭	平成22年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	落とし穴、縄文土器片、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世陶磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物	平成28年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器片、弥生土器片	平成29・30年度
44	中川9、平泉野遺跡	土坑、縄文土器、石器、陶器	平成30年度
45	若井原194-2、平泉野遺跡	溝	平成30年度
46	駒形45-4	土坑、ピット、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片、陶磁器片	平成30・令和元年度
47	駒形4-1	土坑、縄文土器片、礫石器、石製品	令和２年度
48	駒形1-1	炭窯跡、土坑、柱穴状ピット、溝、縄文土器片、石器	令和３年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表１　骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表

3　駒形１－１地点の調査

調査地点は、駒形根神社の南西約600mにあり、平泉野台地と呼ばれる丘陵の一関市厳美町字駒形１－１に所在する（図３）。現白山社より約14m低いところに位置し、標高は約214～216mである。平泉野台地西の南斜面からつながる中位段丘面にあり、現況は、雑木林である。

『陸奥国骨寺村絵図』（簡略絵図）では、平泉野台地と思われる丘陵が南北に３つの山稜線に分けて表現され、南側の稜線内に「骨寺跡」の文字が見え、その稜線の途切れるあたりに「白山」の文字と5つの礎石と思われる丸があり、これに接して「寺崎」の文字が書かれている。絵図における画像や文字の向きから見て、骨寺跡は東の里に望むような向きと位置にあったと考えられている。白山社もまた、骨寺の境内鎮守とみなされ、骨寺と関連して勧請されたと推定されている。したがって、骨寺の位置は、白山社や寺崎と近接していたとみなされる。白山社も寺崎（屋敷名）も実在しており、かつての骨寺はもこの周辺に実在し、骨寺は平泉野台地南西側にあったと推定されている。

今回の確認調査は上記の推定から、平泉野台地の高位段丘の南西側ある中位段丘に再度注目して調査区を選定した。中位段丘における過去の確認調査は、平成17・23・24年度に４地点（図２－２の21、22、33、37）で行われ、これらは、中位段丘の北側半分に位置している。確認された遺構は炭窯、土坑、落とし穴、遺物は縄文土器、石匙、石器、などであり、「骨寺（堂）跡」に伴う遺構、遺物は確認できていない。今回の調査地点は、今まで調査されていない中位段丘で、階段上の平坦面であり、須川岳も眺望できる位置にもあり、可能性があると考え、遺構の有無、特に「骨寺（堂）跡」の痕跡を確認するために実施した。

調査期間は令和３年４月12日～７月16日、調査面積は約590㎡である。

調査地点は、平泉野台地から続く南斜面を経て平坦地に変換する地点である。調査区は、西側の広い階段状の平坦面と東側の狭い階段状の平坦面からなる。広さは、西調査区が最大東西径25m、最大南北径18m、東調査区が最大東西径13m、最大南北径15mである。土層観察用のベルトを設定し、重機により表土を除去した後、人力により遺構検出、Ⅱ層の掘り下げ・遺構検出・精査を行った。

図面の作成に当たっては、下記の基準杭の座標を基にして実測を行った。写真撮影は一眼レフ・デジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基R3-1　X＝－113820.703、Y＝＋9558.781、H＝214.548

基R3-2　X＝－113827.508、Y＝＋9513.495、H＝214.262

調査の結果、遺構は炭窯、土坑、柱穴、溝である。遺物は、縄文土器片、石器、礫石器である。調査終了後、残土を用いて、重機を使用して埋め戻し、現状の回復を行った。

※敷地の境界，その他掲載されている情報の内容を証明するものではありません。　　縮尺 1/5000

図３　調査区位置図

（１）基本土層

Ⅰ層：10YR1/3黒褐色粘土質シルト。やや粘性あり。しまり弱い。植物根、植物遺体を上位に多く含む。木根による攪乱あり。表土。層厚約10～20cm。

Ⅱ層：10YR3/3暗褐色粘土質シルト。やや粘性あり。しまり弱い。亜円礫（径５～10cm大）を少量含む。一部にぶい黄褐色（10YR4/3）シルトの小ブロックを含む。剥片石器を含む。層厚約10～20cm。

Ⅲ層：10YR2/2黒褐色粘土質シルト。粘性あり。しまり中。暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトの小ブロックを少量含む。層厚約10～15m。

Ⅳ層：10YR3/4暗褐色粘土質シルト。粘性やや強い。しまりあり。亜円礫（径10～20cm大）をやや多く含む。下位層の腐植層。層厚約５～10cm。地山。

Ⅴ層：10YR5/8黄褐色粘土質シルト。粘性強くあり。しまりやや強い。亜円礫（径10～20cm大）を上位にやや多く含む。層厚20cm以上。地山。

（２）確認した遺構と遺物

調査区は、東側と西側にそれぞれ階段状の平坦面が２段ある。西側が大きく、東側が小規模である。２つの調査区を東調査区、西調査区とし、階段状の上の平坦面を上段、下の平坦面を下段と呼ぶこととした。

確認した遺構は炭窯10基、土坑４基、柱穴４個、溝１条である。遺物は縄文土器片１点、石器２点、礫石器１点である。

炭窯ＳＷ－１（図６、写真図版３－１・２、４－７）

西調査区西側の上段から下段につながる南斜面下位で検出された。Ⅱ層を掘り下げ、焼成を受けた暗赤褐色の広がりがみられ、遺構としたものである。南側の過半は溝ＳＤ－１と後世の造成で削平されている。形状は不整楕円形を呈し、規模は東西径3.4m、南北径1.8m（残存部）である。Ⅲ層を掘り込んで作られている。

埋土は上半部が下位に明黄褐色シルトの小ブロックを含む暗赤褐色粘土質シルト層、下半部が黒褐色粘土質シルト層で占められている。底面は緩い凹凸があるが平坦である。壁高は北壁で21cmである。煙出し口は北壁中央部にあり、幅50cm、長さ44cmの規模のものである。煙出し口の底面は、焼成を受け赤変している。煙出口そばにある亜角礫（長径20cm）は、煙出口を構成していたものかもしれない。出土遺物はない。時代は不明である。

炭窯ＳＷ－２（図６、写真図版３－３・４、４－７）

西調査区の西端で上部の平坦面から下部の平坦面につながる南斜面にあり、東にあるＳＷ－１と近接している。Ⅱ層を取り除いた後に、暗赤褐色土の広がりがみられ、遺構とわかったものである。下半部を東西に伸びる溝ＳＤ－１に切られ、また、後世の造成で削平されている。残存する壁から推定すると、形状は楕円形を呈し、残存する壁の規模は、東西径4m、南北径1.2mである。

埋土は上半部が焼成を受けた暗赤褐色粘土質シルト層、下半部が黒褐色粘土質シルト層で占められている。底面はほぼ平坦である。最大壁高は北壁で21cmである。北壁側に煙出口が検出されている。規模は、幅60cm、長さ50cmである。底面が焼成を受けている。右側にかまどの構成礫と推定される長径37cmの亜角礫が検出されている。出土遺物はない。時代は不明である。

炭窯ＳＷ－３（図７、写真図版３－５・６、４－８）

西調査区の東端に位置し、表土を掘り下げ後、黄褐色のシルトのブロックの広がりがみられ、遺構

と判明したものである。下半部は溝ＳＤ－１に切られ、後世の造成で削平されている。形状は不整楕円形を呈し、規模は東西経４ｍ、南北径2.4m（残存部）である。

埋土は、最上位が明黄褐色シルトの小ブロックを含む暗赤褐色粘土質シルト層、上部が下位ににぶい黄橙色シルトの小ブロックを帯状に含む黒褐色粘土質シルト層，下部が黒褐色粘土質シルト層で構成されている。最下部層は焼成を受けている。掘りすぎがみられるが、底面は幾分南側に傾斜しているものと推定される。最大壁高は東西壁で30cmである。北壁側に、幅68cm、長さ30cmの規模を持つ煙出口が検出されている。出土遺物はない。時期は不明である。

炭窯ＳＷ－４（図８、写真図版３－７・８、４－７）

西調査区中央部で上部の平坦面から下の平坦面につながる南斜面下位にあり、西にあるＳＷ－１と隣接している。下半部は溝ＳＤ－１に切られ、後世の造成で削平されている。また、北側はにぶい黄橙色シルトのブロックを含む埋土を持つ土坑を切っている。形状は不整楕円形を呈し、規模は東西径2.4m、南北径2.1m（残存部）である。

埋土は上部が黒褐色粘土質シルト層、中部が黄褐色シルトやにぶい黄橙色シルトの小ブロックを含む黒褐色粘土質シルト層、下部が暗赤褐色シルト層で構成されている。底面は緩やかな凹凸があるが平坦で、直上は焼成を受けている。最大壁厚は北壁側で24cmである。煙出口が予想される北側の位置を掘り下げて確認しようとしたが、確認できなかった。北側の底面直上に長径36cm、短径24cmの扁平な礫が検出されている。煙出し口の構成礫であった可能性がある。出土遺物はない。時期は不明である。

炭窯ＳＷ－５（図８、写真図版４－１・２）

東調査区中央部に位置し、Ⅱ層を掘り下げた段階で黄褐色シルトのブロックの広がりがみられ、遺構と判明したものである。形状は不整楕円形を呈し、規模は東西径2.5m、南北径２ｍである。

埋土は、上部が黒褐色粘土質シルトの小ブロックを含む黒色粘土質シルト層、下部が黒褐色粘土質シルトの小ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルト層、最下部が炭化物、焼土ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルト層で構成されている。底面は中央がややくぼむ浅皿状を呈しており、直上は焼成を受けガリガリに硬い。最大壁高は東壁で11cmである。煙出し口は北壁側で検出され、規模は幅40cm、長さ30cmである。出土遺物はない。時期は不明である。

炭窯ＳＷ－６（図９、写真図版４－３）

西調査区の東側で､東に隣接するＳＷ－３と同じように黄褐色シルトのブロックの広がりがみられ、遺構としたものである。広がりから、形状はほぼ円形または楕円形を呈し、規模は東西径3.4mである。精査をしていないので詳細は不明である。出土遺物はない。時期は不明である。

炭窯ＳＷ－７（図９、写真図版４－４・７）

西調査区中央部下段にあり、北にあるＳＷ－４や南西にあるＳＷ－８と隣接している。後世の造成で削平されており、焼成を受け硬くなっている底面の広がりから、遺構と判明したものである。中央部はＳＫ－３に切られている。形状は南西部が不明瞭であるが、楕円形を呈するものと思われる。規模は東西経2.6m、南北径2.9m（推定）である。煙出口は確認できなかった。出土遺物はない。時代は不明である。

炭窯ＳＷ－８（図９、写真図版４－４・７）

西調査区中央部の下段の平坦面にあり、北西にあるＳＷ－７と隣接している。削平を受けており、底面のみが残存しているものである。下半部は消失している。形状は円形または楕円形を呈し、規模は東西径2.8mである。底面は焼成を受けガリガリに硬くなっている。出土遺物はない。時期は不明

である。

炭窯ＳＷ－９（図10、写真図版４－５）

東調査区の中央部上段にあり、北東にあるＳＷ－５と隣接している。ＳＷ－５と同じ様相の黄褐色シルトのブロックの広がりがみられ、遺構としたものである。形状は不整楕円形を呈し、規模は東西経2.1m、南北径2.2mである。煙出口と推定される位置から、径29cm大の亜角礫がみられた。精査は行っていないので詳細は不明である。出土遺物はない。時期は不明である。

炭窯ＳＷ－10（図10、写真図版４－６）

東調査区中央部下段に位置し、焼成を受けガリガリに硬くなっている広がりがみられ、遺構としたものである。上部は後世の造成で削平されている。すぐ北に溝ＳＤ－１が東西に走っている。形状は円形または楕円形を呈し、規模は径３m前後と推定される。底面は黒色化し小さい炭化物が多く含まれている。煙出口は検出されていない。削平されたと推定される。出土遺物はない。時期は不明である。

土坑ＳＫ－１（図11、写真図版５－１・２）

西調査区中央部の下段にあり、ＳＷ－７を切っている。西にあるＳＫ－２と近接している。Ｖ層上面で検出された。形状は不整円形で、規模は東西径64cm、南北径74cm、深さ12cmである。

埋土は黒色粘土質シルトの小ブロックを少量含む黒褐色粘土質シルト層で占められている。底面は中央が窪む浅皿状を呈している。出土遺物はない。時期は不明である。

土坑ＳＫ－２（図11、写真図版５－３・４）

西調査区中央部の下段にあり、東にあるＳＫ－２と近接している。Ｖ層を彫り込んで作られている。形状は不整楕円を呈し、規模は東西径68cm、南北径80cm、深さ8cmである。

埋土は黄褐色粘土質シルトの小ブロックと小礫を少量含む黒褐色粘土質シルト層で占められている。底面は平らで壁が外反している。出土遺物はない。時期、性格は不明である。

土坑ＳＫ－３（図11、写真図版５－５・６）

西調査区下段の南西側にある。Ｖ層を掘り込んで作られている。重複関係の遺構はない。形状は楕円形で東西径50cm、南北径62cm、深さ14cmである。

埋土は上部が小礫をわずかに含む黒褐色シルト層、下部は３cm未満の小礫を少量含む黒褐色粘土質シルト層で占められている。底面は壁面が緩く外反する皿状を呈している。出土遺物はない。時期、性格は不明である。

土坑ＳＫ－４（図11、写真図版５－７・８）

西調査区下段の中央部にあり、周辺にその他の遺構は見られない。Ｖ層を掘り込んで作られている。形状は楕円形で、東西径78cm、南北径60cm、深さ28cmである。

埋土は上部が黒褐色粘土質シルト層、下部が黄褐色粘土質シルトの小ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルト層で構成されている。出土遺物はない。時期、性格は不明である。

柱穴ＳＰ－１・ＳＰ－２・ＳＰ－３・ＳＰ－４（図12、写真図版６）

柱穴４個は西調査区下段の西側に散在している。建物跡となるような柱穴配置ではない。柱穴の規模はＳＰ－１（径24×34cm、深さ10cm）、ＳＰ－２（径46×18cm、深さ18cm）、ＳＰ－３（径24×28cm、深さ10cm）、ＳＰ－４（径30×47cm、深さ16cm）である。

埋土はすべて単層で、ＳＰ－１が小礫を含む黒褐色粘土質シルト層、ＳＰ－２が黒褐色砂質シルト層、ＳＰ－３とＳＰ－４が小礫、黄褐色粘土質シルト層の小ブロックを少量含む黒褐色粘土質シルト層で占められている。出土遺物はない。時期は不明である。

溝ＳＤ－１（図13、写真図版７－１～４）

溝は西調査区から東調査区にかけて、東西に伸びている。上段の平坦面から緩く傾斜して下段につながる転換点に作られている。炭窯ＳＷ－１・２・３・４・６を切っている。規模は幅が40～95cm、深さが10～45cm、底面がＵ字形を呈している。溝は調査区の西端から東側まで確認され、両側の調査区外へつながっていると推定される。水は西から東に流れ、東に進むにつれ規模は大きくなる。

埋土は上部が場所によって、黄褐色粘土質シルトの小ブロックを含む黒褐色粘土質シルト層、下部が黒褐色粘土質シルト層で構成されている。場所によっては、溝脇上部に積まれていたと推定される円礫が含まれている。Ⅳ・Ⅴ層を掘り込んで作られており、下段をⅣ層上面まで削平したときに、上段から浸みてくる水を流すための暗渠として掘られていたと考えられる。出土遺物はない。時期は不明である。

遺構外出土遺物（写真図版７－５～８、表２・３）

確認した遺物は、縄文土器片１点、石器２点、礫石器１点である。

１は縄文土器片で、西調査区中央部の南斜面のⅡ層から出土している。口縁部片で、口唇部が肥厚している。全体的に摩耗している。体部外面に３条の沈線が施され、２条目と３条目の間に刺突文が施文されている。体部外面は縄文が施文されているようだが不明瞭である。時期は、縄文中期に属すると考えられる。

２は石箆状石器で、西調査区中央部南斜面のⅡ層から出土している。材質は硬質頁岩である。両面に調整痕を有する。縦８cm、最大幅3.8cm、最大厚2cm、重さ610gである。

３は削器で、西調査区の上段西側のⅡ層から出土している。上部は欠損している。材質は硬質頁岩である。縦6.1cm、最大幅2.8cm、最大厚1.3cm、重さ219gである。

４は台石として使用されたと考えられる礫石器破片で、西調査区下段の東側から出土している。Ⅴ層に突き刺さった形で検出されている。人為的に動かされたものと考えられる。片面は平らに摩耗しており使用痕が確認できる。焼成を受けており、後世に炭窯などで再利用していた可能性もある。縦12.1cm、横12.4cm、厚さ4.9cm、重さ966gである。材質は溶結凝灰岩である。

２～４の石器は縄文時代に属するものである。周辺の縄文時代の遺跡から、縄文時代中期～後期のものと推定される。

（３）まとめ

今回の調査で、推定も含めて検出された炭窯は10基である。精査したもの、下底部のみ検出されたもの８基についてまとめる。斜面下方である南側下半部が削平されている炭窯が多いため、規模を東西径の長さで分けると、東西径が３m以下のものはＳＷ－４、ＳＷ－５、ＳＷ－７、ＳＷ－８、ＳＷ－10の５基（Ａ群）、東西径が３mより大きものものはＳＷ－１、ＳＷ－２、ＳＷ－３の３基（Ｂ群）である。Ａ群は、５基のうち４基が焼成を受けガリガリに硬く黒色化している。残り１基（ＳＷ－４）は底面が一部焼成を受けて変化している。形態・規模から、形状が円形で規模の小さい「昔ガマ」と呼ばれる窯や、平面形が楕円形で規模の小さく大正期に改良され普及した「小野寺窯」に類似している。近代以降のものと考えられる。Ｂ群３基は、煙出し口周辺の底面が焼成を受けて変化している。また炭窯の壁などの崩壊土と考えられる土が埋土に含まれている。しかし、底面全体がＡ群のようにガリガリ硬く変化していない。底面の掘りすぎがみられるが、Ａ群と様相を異にしている。炭窯と推定して扱ったが、断定するまでには至っていない。焼成されていた遺構であることは確かである。今後研究して明らかにしていきたい。Ｂ群は形態・規模などから、幅が４mと規模が大きく、平面形が円形～不整楕円形である。住田町の「子飼沢Ｉ遺跡」から検出されている２号窯、３号窯とやや類似して

いる。２つの窯のAMS年代測定では、18世紀前半の年代測定値が出ている。このことは、Ｂ群の炭窯の年代を考える上で一つの参考資料となる。B群を近世以降と推定した。

発掘調査区から上の範囲に、まだ埋まり切らない炭窯が５基みられる。未精査のため詳細については不明である。かつて骨寺村荘園遺跡発掘調査（平成17年度調査）で検出された平面形が逆三角形の炭窯１基、一関市の大平遺跡発掘調査（昭和59年度調査）からも平面形が逆三角形の炭窯、楕円形の炭窯が１基ずつ検出されている。平面形が逆三角形の炭窯は明治期に改良された「楢崎ガマ」と類似しており、明治前期以降のもので、埋まり切らない周辺の炭窯も近代・現代に属するものであると考えられる。

松本博明氏らが平成21年度に本寺地区の人たちに行った聞き書き調査（2011年刊行「一関市厳美町本寺の民俗―骨寺村荘園遺跡のくらし」）によると、「かつて、平泉野でも炭焼きが行われていた」ことがわかっている。「本寺周辺では昭和35・6年ころまで炭を焼いていた」ということである。また、近世の古文書『宝暦封土記』の宝暦13年（1763）の五串村における馬数項目には「炭薪伐励・・」が記されており炭が生産されたことがうかがわれる（鈴木雄己2021「近代・近世における本寺地区とその周辺の山仕事」レポートによる）。本寺地区では近世以降、炭窯で木炭を生産していたことがわかっている。今回の調査で検出された炭窯も、これらの調査成果を裏付けるものとなった。

次年度は、今回の調査区の北側にあたる、平泉野台地最大の平場の南西端部分を調査し、絵図にある骨寺を中心とする宗教施設の手がかりを探る予定である。

（光井）

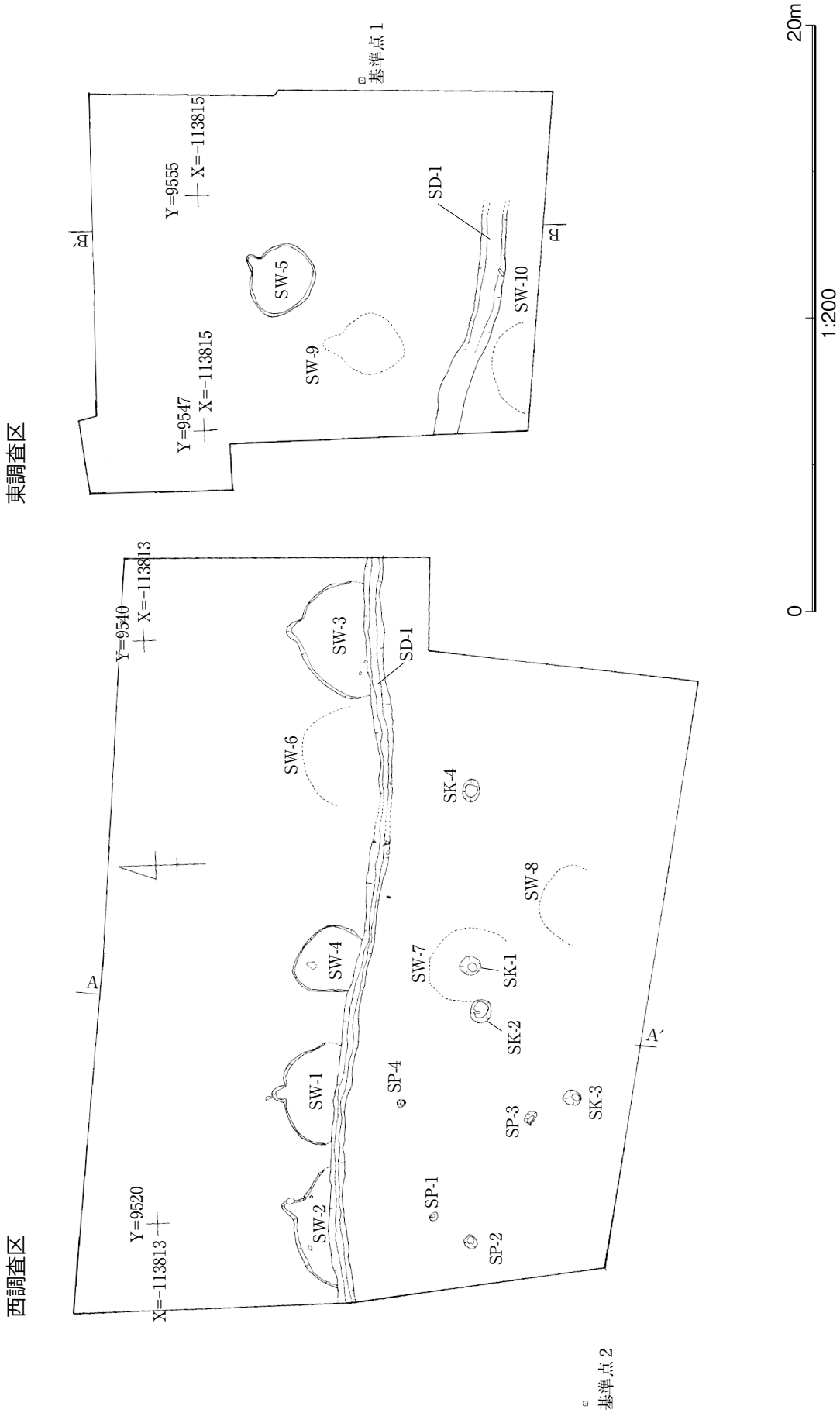
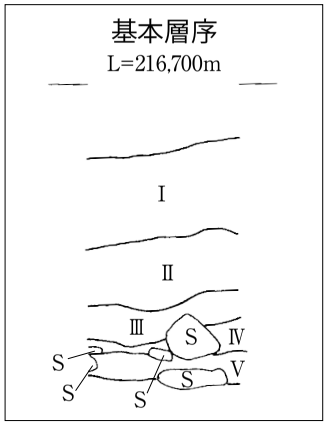
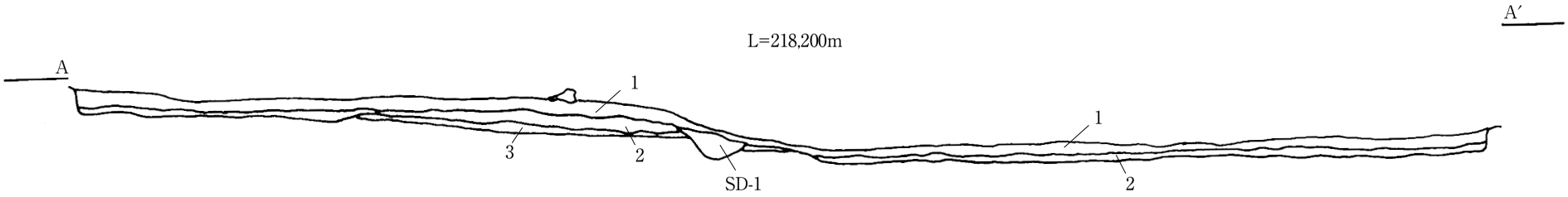

東調査区
西調査区
基準点1
基準点2
Y=9555
X=-113815
Y=9547
X=-113815
Y=9540
X=-113813
Y=9520
X=-113813
SW-1
SW-2
SW-3
SW-4
SW-5
SW-6
SW-7
SW-8
SW-9
SW-10
SD-1
SP-1
SP-2
SP-3
SP-4
SK-1
SK-2
SK-3
SK-4
A
A′
B
B′
0
20m
1:200

図４　遺構配置図

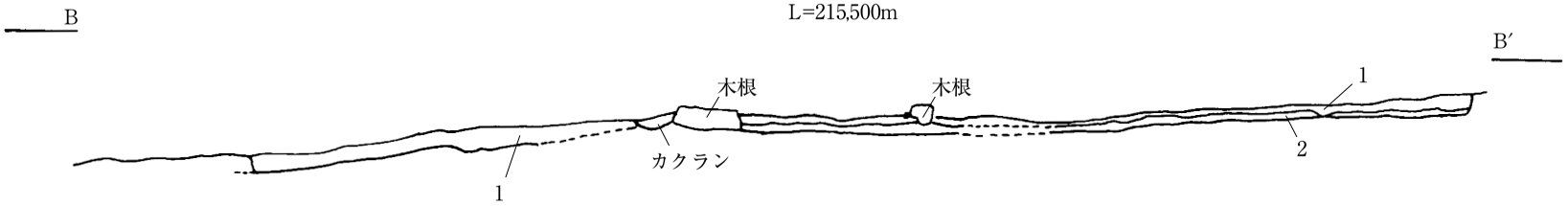


西調査区南北断面



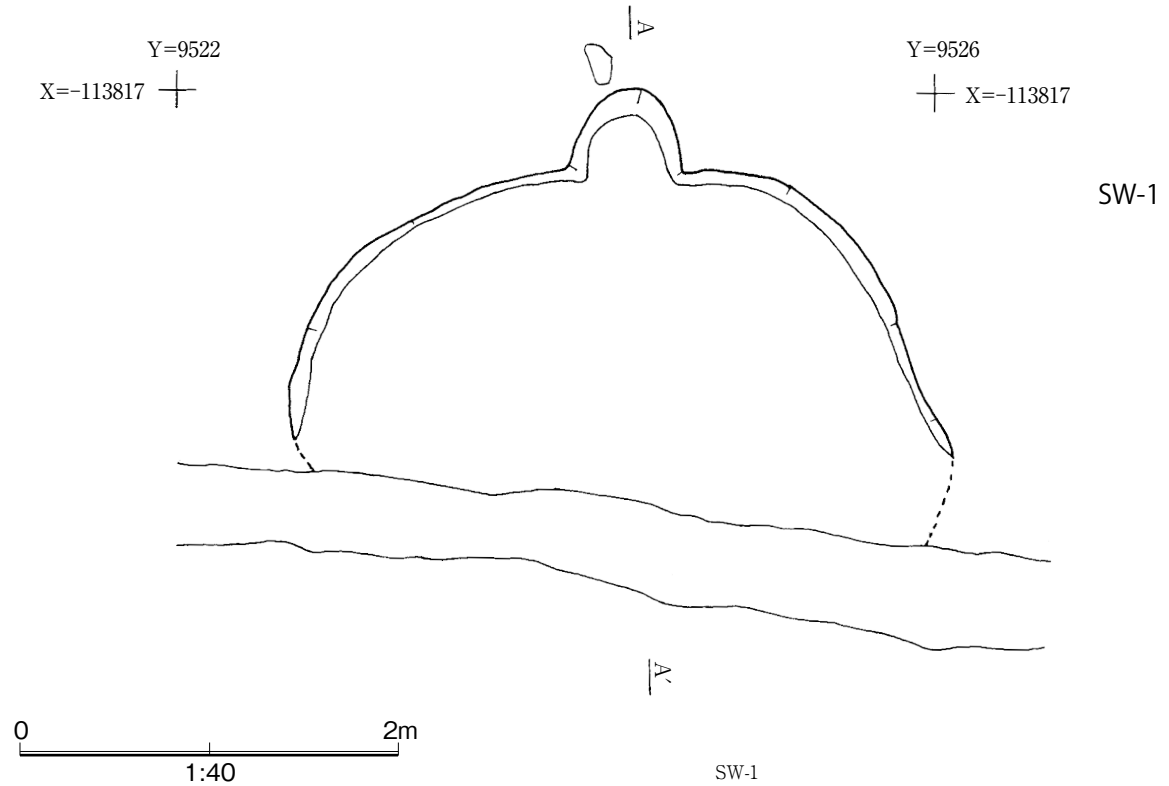
土層注記
1　10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。やや粘性あり。
2　10YR3/3 暗黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。やや粘性あり。にぶい黄褐色（10YR4/8）シルトの小ブロックを含む。
3　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトの小ブロックを含む。

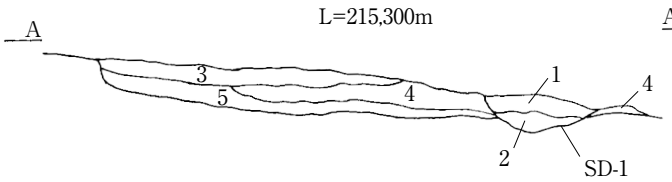
東調査区南北断面



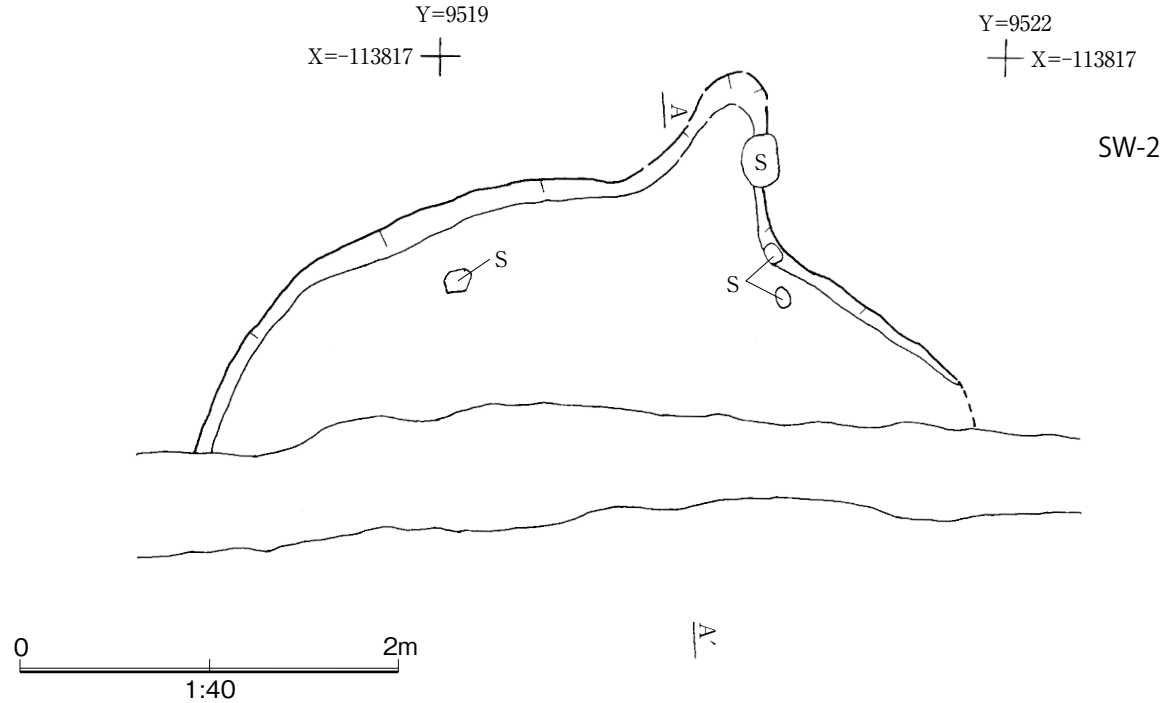
土層注記
1　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。やや粘性あり。
2　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。やや粘性あり。

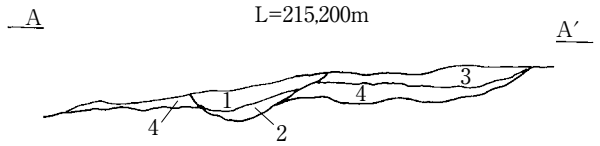
図５　調査区基本層序・土層断面図





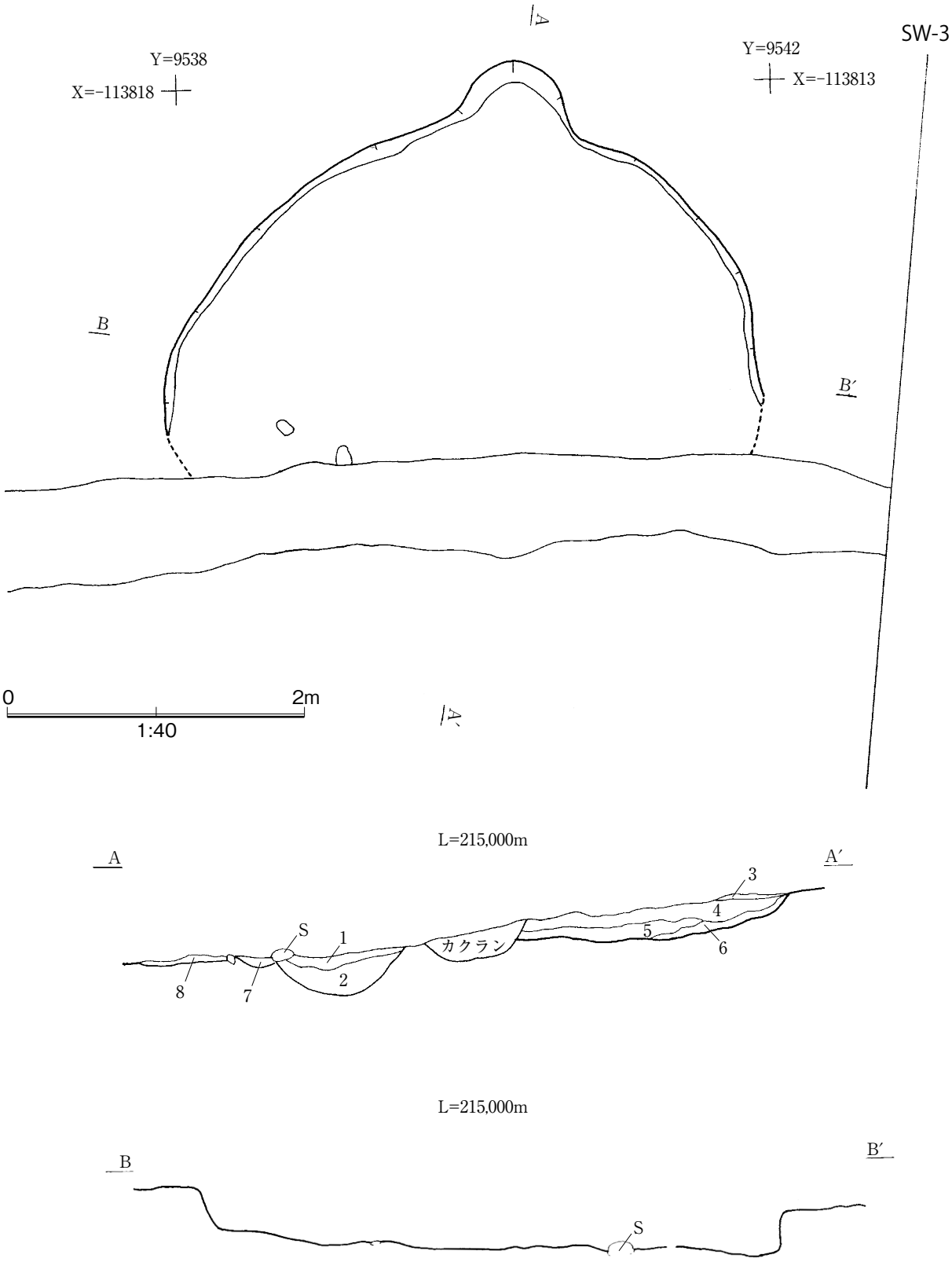
SW-1
土層注記
1　5YR2/2 黒褐色シルト。しまっていない。粘性あり。
2　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。砂礫を含む。
3　5YR3/2 暗赤褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。明黄褐色（10YR6/6）シルトのブロックを帯状に含む。（最大厚さ 4cm、長さ 15cm）
4　5YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性強い。
5　10YR2/2 黒褐色やや粘土質シルト。ややしまっている。粘性強い。





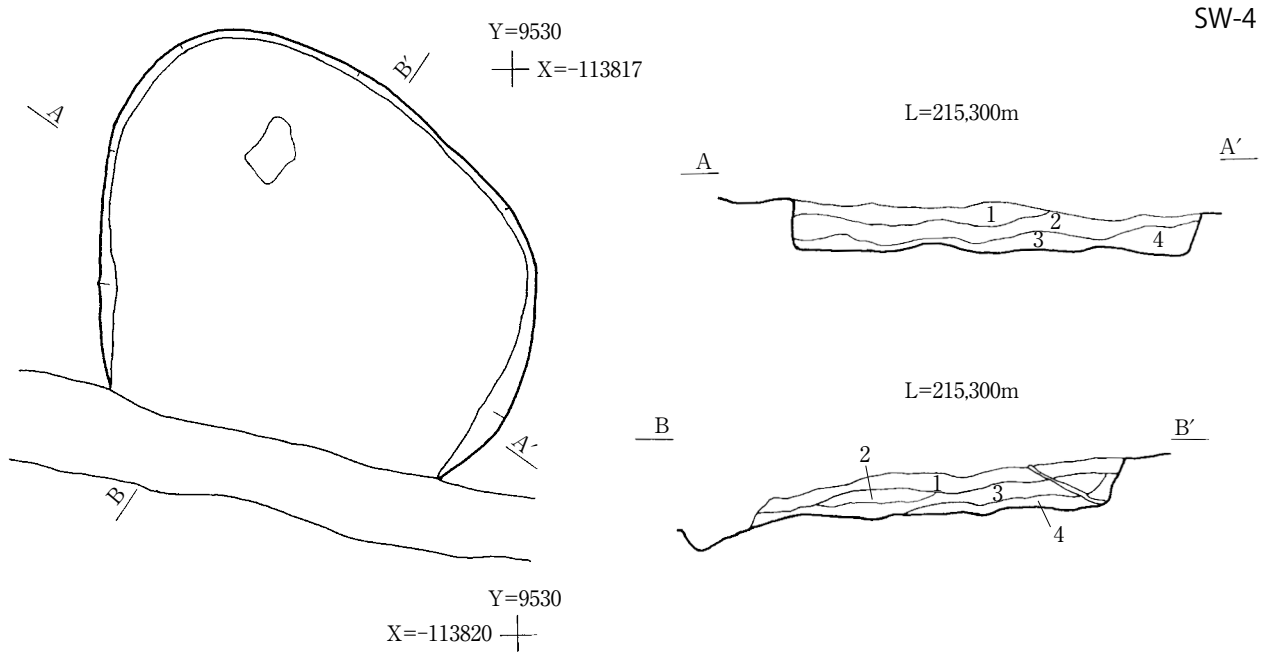
SW-2
土層注記
1　5YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを両側に含む。
2　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。
3　5YR3/2 暗赤褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。焼土化　壁の崩壊土。
4　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。

図６　SW-1・２　実測図



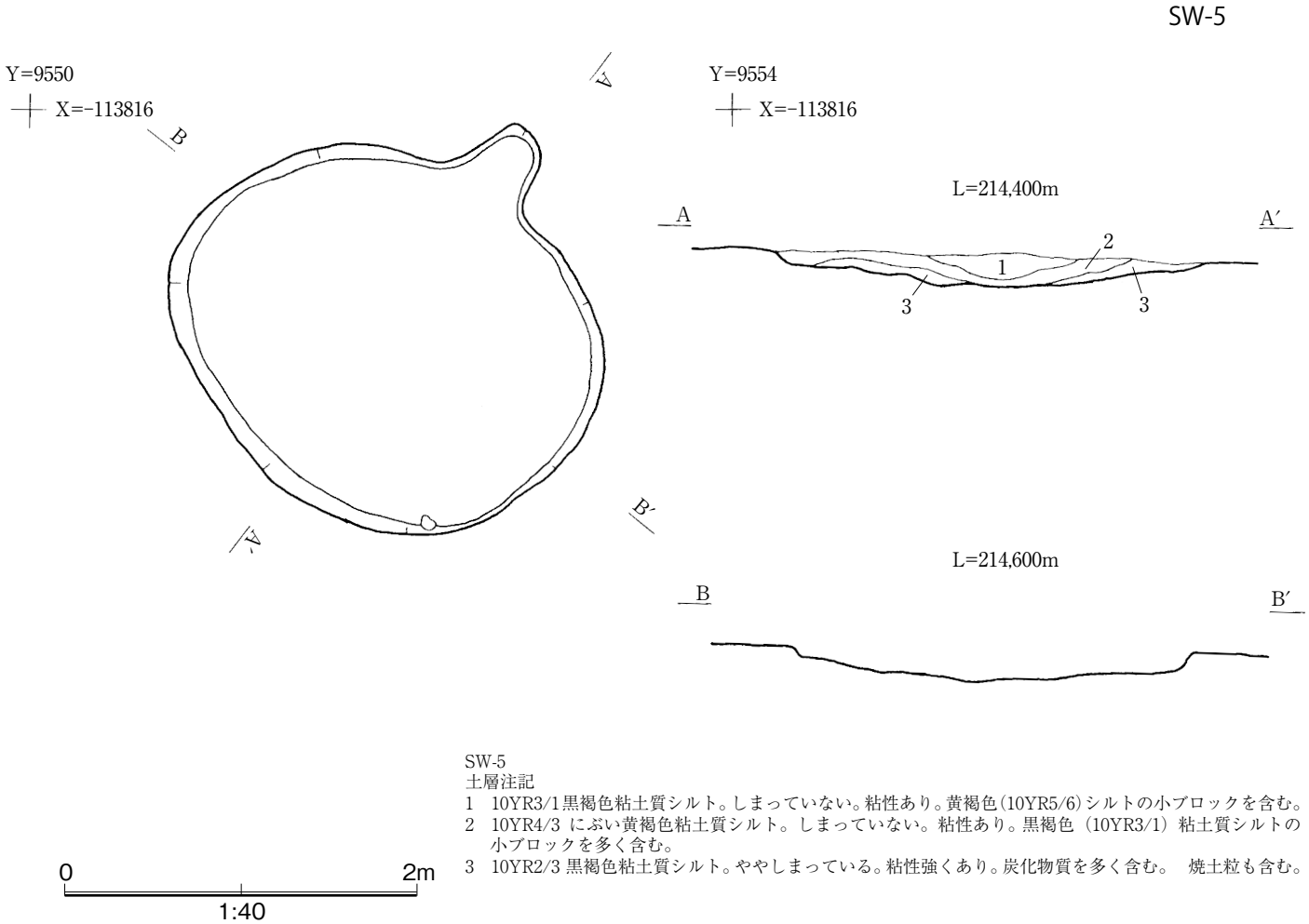
SW-3
土層注記
1　10YR2/1 黒色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。
2　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性やや強い。小円礫を少量含む。
3　5YR3/2 暗赤褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。
4　10YR2/1 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。(10YR5/6) 黄褐色シルトの小ブロックを下位に含む。
5　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
6　5YR3/1 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。焼成を受けている。
7　10YR2/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。径 10 ～ 20mm 台の亜円礫を少量含む。(掘りすぎ)。
8　10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。地山。(掘りすぎ)。

図７　SW-3　実測図



SW-4
土層注記（A-A′、B-B′共通）
1　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。やや粘性あり。
2　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。黄褐色（10YR5/6）シルトの小ブロック、にぶい黄澄色（10YR4/3）の小ブロックを多く含む。
3　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。しまっている。粘性強い。
4　10YR3/4 暗褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。炭化物を少量含む。

0　2m
1:40



SW-5
土層注記
1　10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。黄褐色（10YR5/6）シルトの小ブロックを含む。
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトの小ブロックを多く含む。
3　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性強くあり。炭化物質を多く含む。　焼土粒も含む。

0　2m
1:40

図８　SW-4・5　実測図

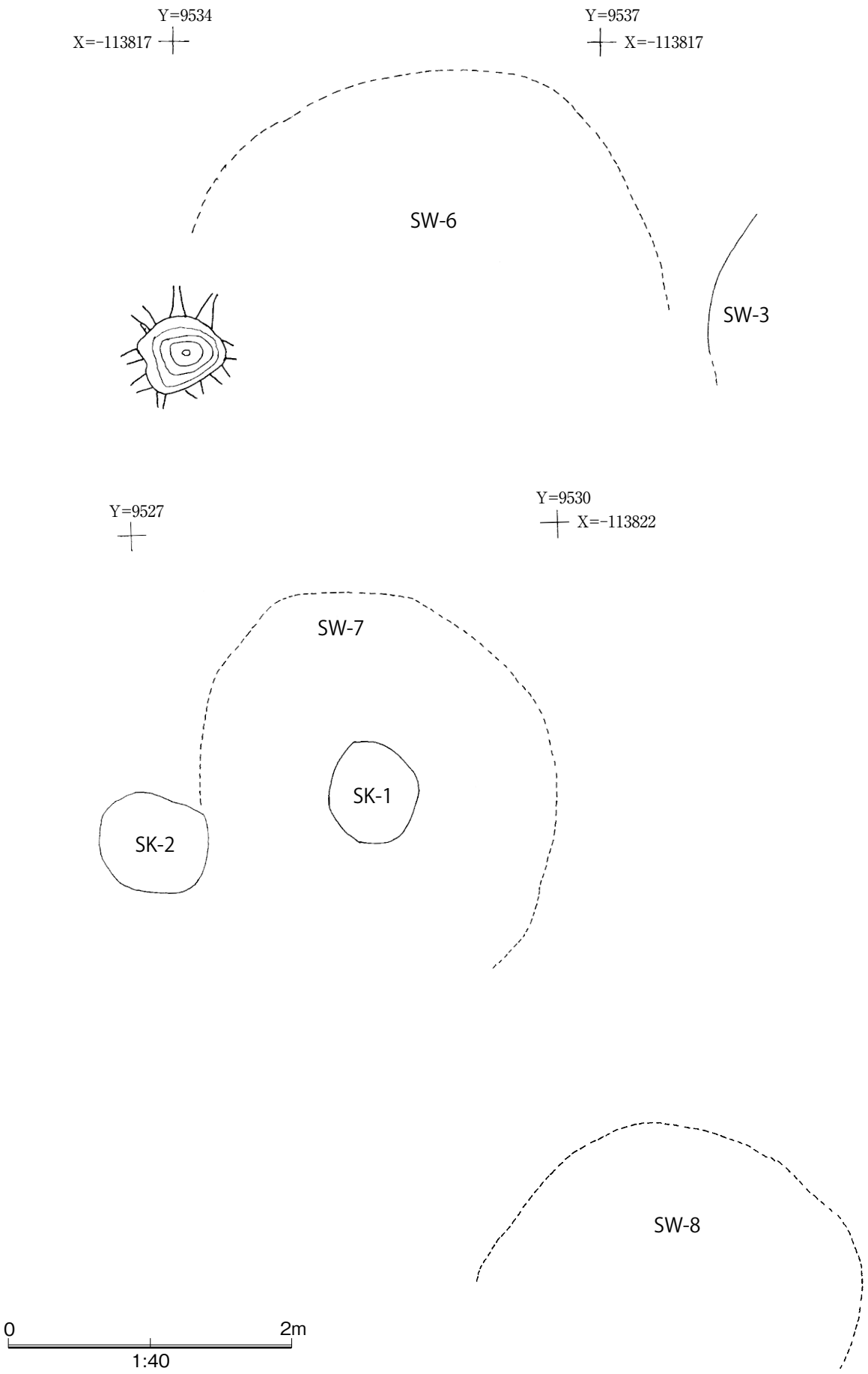

Y=9534
X=-113817
Y=9537
X=-113817
SW-6
SW-3
Y=9527
Y=9530
X=-113822
SW-7
SK-1
SK-2
SW-8
0
2m
1:40

図９　SW-6・7・8　実測図

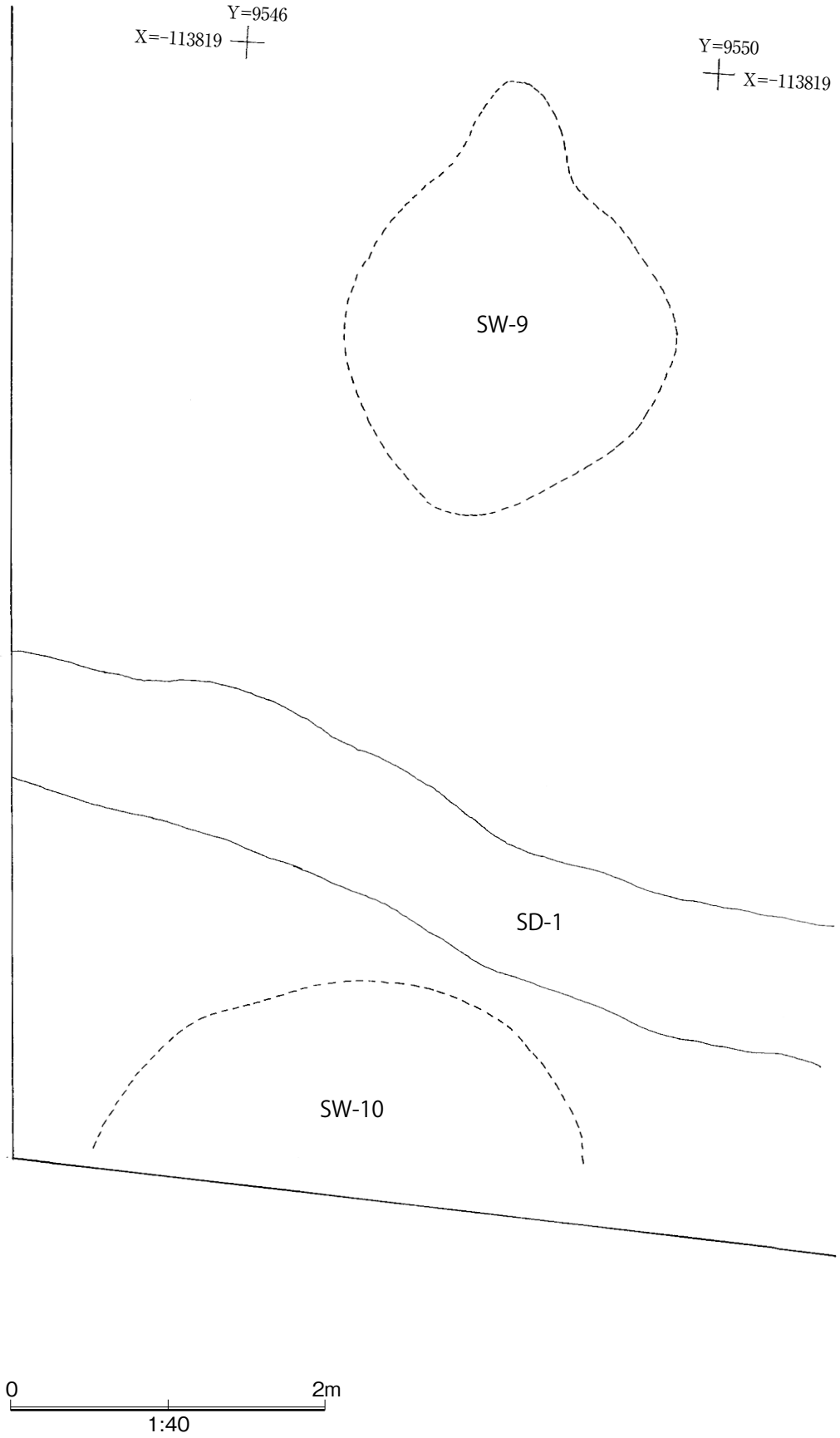
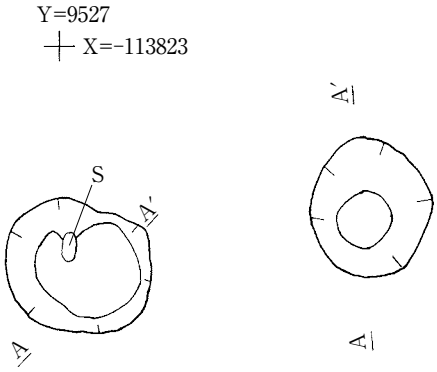
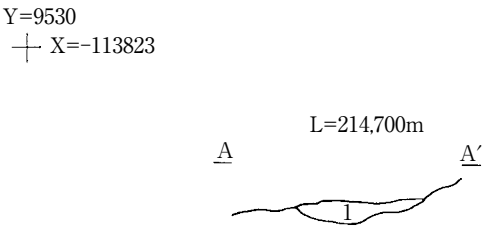


図10　SW-9・10　実測図

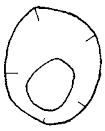


SK-2

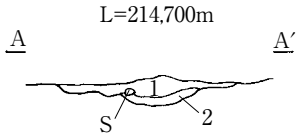
SK-1



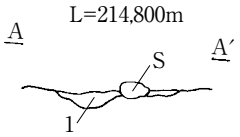
SK-1
土層注記
1　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黒色（10YR1/2）粘土質シルトの小ブロックを少量（3％）含む。



SK-3

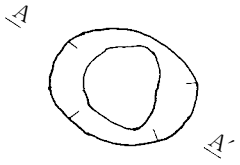


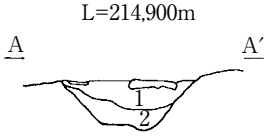
SK-3
土層注記
1　10YR2/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性あり。黒色（10YR1/2）粘土質シルトの小ブロックを少量（3％）含む。
2　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。3cm 未満の小円礫を少量含む。



SK-2
土層注記
1　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黄褐色（10YR5/6）の粘土質シルトの小ブロックを少量含む。小礫（2cm大）を少量含む。

SK-4





SK-4
土層注記
1　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。木根による攪乱あり。
2　10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黄褐色（10YR5/6）粘性シルトの小ブロックを少量含む。

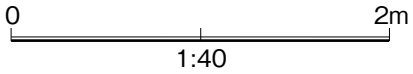
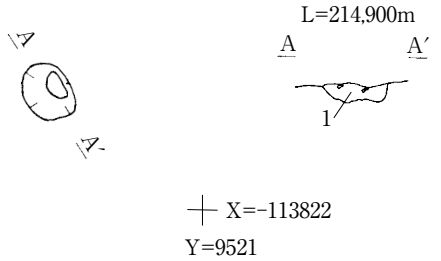


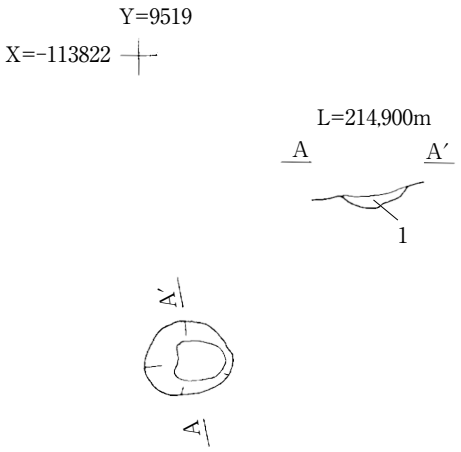
図11　SK-1・2・3・4　実測図

SP-1



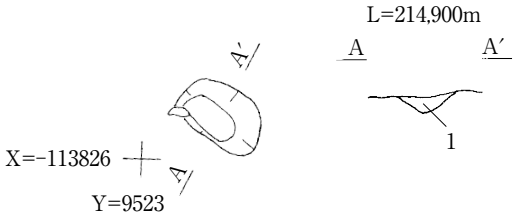
SP1
土層注記
1　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性ややあり。径 1cm 未満の小礫が上位に少量含まれる。最上位に 4 ～ 5 の小礫が含まれる。

SP-2



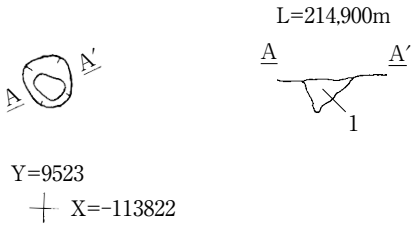
SP2
土層注記
1　10YR3/2 黒褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。中央上部に黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトの小ブロックを少量含む。

SP-3



SP3
土層注記
1　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。径 2cm 未満の小石を微量に含む。黄褐色(10YR5/8)粘土質シルトの小ブロックを微量に含む。

SP-4

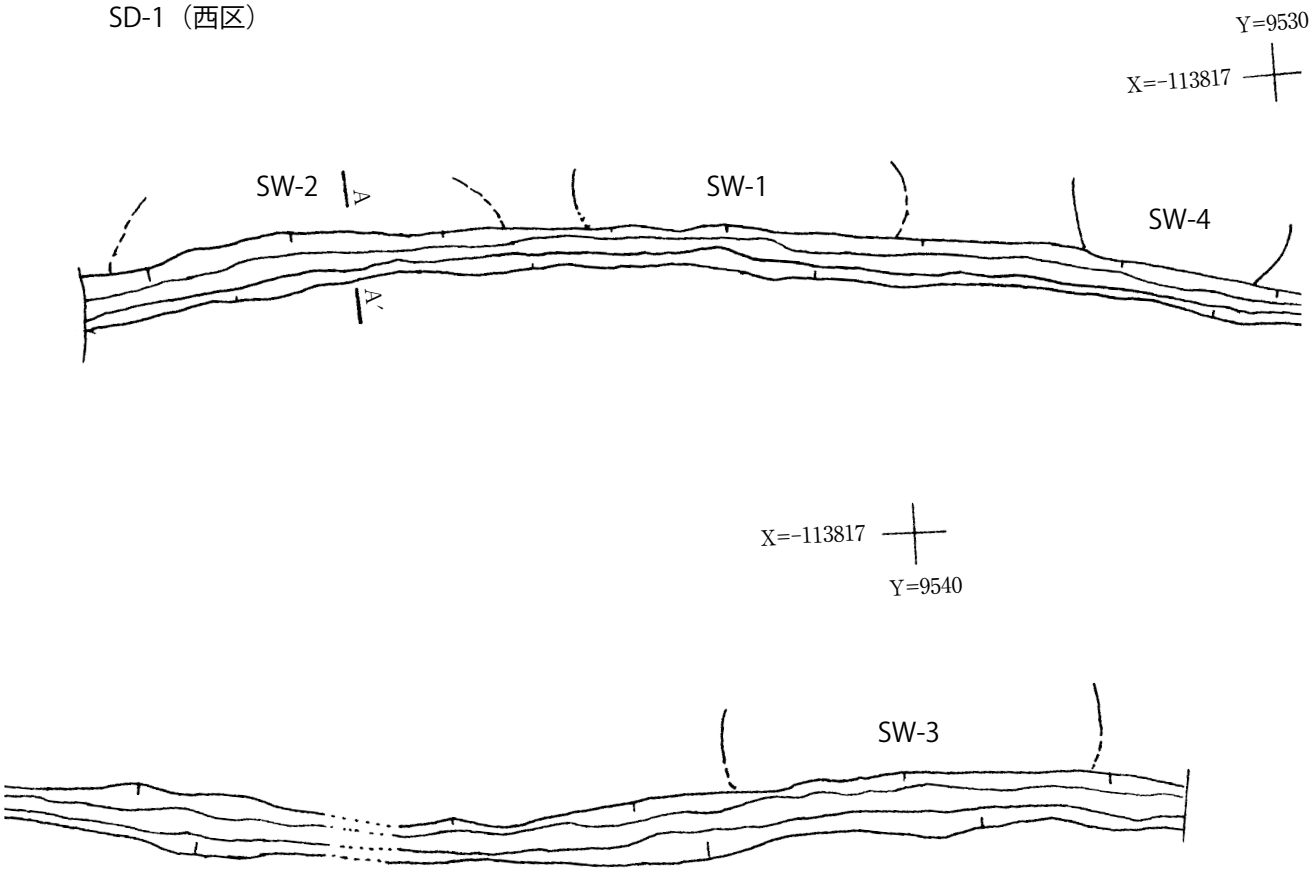


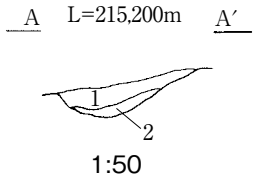
SP4
土層注記
1　10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。黄褐色（10YR5/8）粘土質シルトの小ブロックを微量に含む。上位に 3cm 大の小礫を含む。

0　2m
1:40

図12　SP-1・2・3・4　実測図

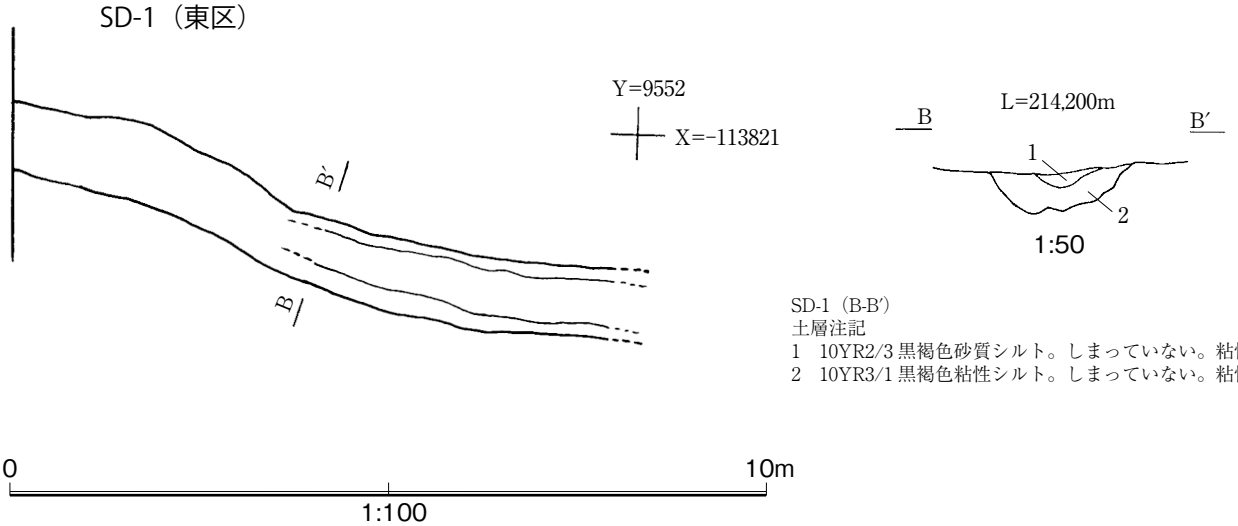
SD-1（西区）





SD-1（A-A′）
土層注記
1　5YR2/2 黒褐色粘土質シルト。しまっていない。粘性あり。黄褐色粘土質シルトの小ブロックを少量含む。
2　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。

SD-1（東区）



SD-1（B-B′）
土層注記
1　10YR2/3 黒褐色砂質シルト。しまっていない。粘性なし。
2　10YR3/1 黒褐色粘性シルト。しまっていない。粘性なし。

図13　SD-1　実測図

4　総括

令和３年度は、白山社及び駒形根神社のうち平泉野台地の南東端に位置する緩斜面を調査した。その結果、炭窯跡、土坑、柱穴状ピット、溝のほか、縄文土器片、石器を検出した。このうち炭窯跡は、遺物が伴わず正確な時期は不明であるが、形態などから近世以降のものと推定される。

調査の目的である、「陸奥国骨寺村絵図」にある「骨寺（堂）跡」等の痕跡を確認することはできなかった。

（菅原）

【参考文献】

一関市1977『一関市史』第４巻地域史.

一関市教育委員会2006『岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第１集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.

一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.

一関市教育委員会2018『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.

一関市教育委員会2019『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.

一関市教育委員会2020『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.

一関市教育委員会2021『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第32集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』.

伊藤信1957「辺境在家の成立―中尊寺領陸奥国骨寺村について―」『歴史』第15号　東北史学会.

畠山剛1980「岩手木炭」日本経済評論社.

入間田宣夫2016「骨寺村の成立は、いつまで遡るのか―骨寺村絵図研究の過去・現在・未来（１）―」『一関市博物館研究報告』第19号.

大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号.

一関市教育委員会・建設省岩手工事事務所1985『大平遺跡発掘調査報告書』.

黒田日出男1995「陸奥国中尊寺領骨寺村との対話―描かれた東国の村と境相論―」『描かれた荘園の世界』新人物往来社.

島田直明2012「Ⅲ．骨寺村荘園遺跡の植生・植物相―特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.

関根達人2009「北奥の一二世紀―堂ヶ平経塚の検討―」『平泉文化研究年報』第９号　岩手県教育委員会.

松本博明2011『一関市厳美町本寺の民俗―骨寺村荘園遺跡のくらし―』　一関市教育委員会.

土井宣夫2012「Ⅱ．地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.

広田純一・菅原麻美2018「骨寺村荘園遺跡における田越し灌漑システムの実態と骨寺村絵図（詳細絵図）に描かれた水田の推定」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館.

平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ．一関厳美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班.

吉田敏弘1989「骨寺村の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻　地人書房.

吉田敏弘2008『絵図と景観が語る　骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森.

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター2011『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第583集子飼沢Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』.

阿部勝則2021「岩手県における近・現代の炭焼きと炭窯跡」『紀要』第40号　(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター.

No.	遺構･層位	種類	部位	年代	備考	図版
1	西調査区 上段　Ⅱ層	縄文土器	口縁部	縄文中期	刺突文が施文	写真図版7－5・6

表２　出土土器観察表

No.	出土位置･層位	器種	時代区分	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考	写真図版	遺物番号
1	西調査区　上段　Ⅱ層	石篦製品	縄文	8.0	3.8	2.0	610	頁岩	両面に調整痕あり。	写真図版7－5・6	2
2	西調査区　上段　Ⅱ層	削器	縄文	6.1	2.8	1.3	219	頁岩	上部欠損。	写真図版7－5・6	3
3	西調査区　下段　Ⅱ層	台石	縄文	12.1	12.4	4.9	966	溶結凝灰岩	礫石器破片。焼成有り。使用痕有り。	写真図版7－7・8	4

表３　出土石製品・石器観察表・遺物観察表

写真図版１

１　西調査区全景（西より）

２　西調査区全景（南より）

１　東調査区全景（西より）

２　東調査区全景（南より）

写真図版３

1　SW-1完堀状況（南より）

2　SW-1埋土断面（西より）

3　SW-2完堀状況（南より）

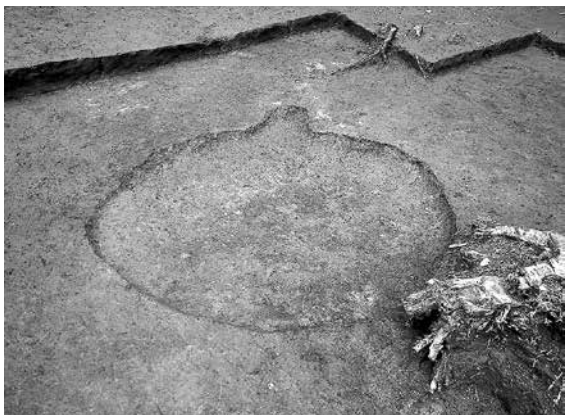
4　SW-2埋土断面（東より）

5　SW-3完堀状況（南より）

6　SW-3埋土断面（東より）

7　SW-4完堀状況（南西より

8　SW-4埋土断面（南東より）



１　SW-5完堀状況（南より）

２　SW-5埋土断面（南西より）

３　SW-6検出状況（左側・南より）

４　SW-7(左側中央)･SW-8(左側下)検出状況(南より)

５　SW-9検出状況（南より）

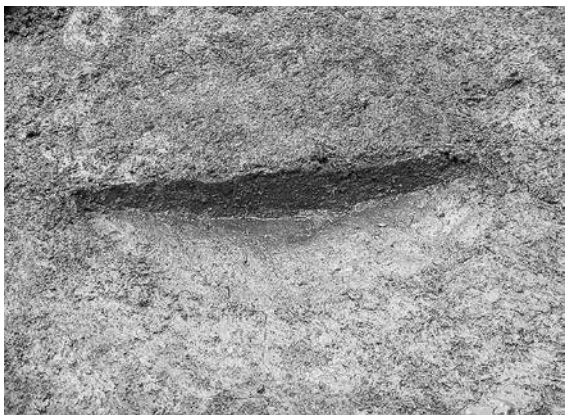
６　SW-10（左側下）検出状況

７　SW-1･2･4(完堀)、SW-7･8検出状況(南より)

８　SW-3埋土断面（西より）

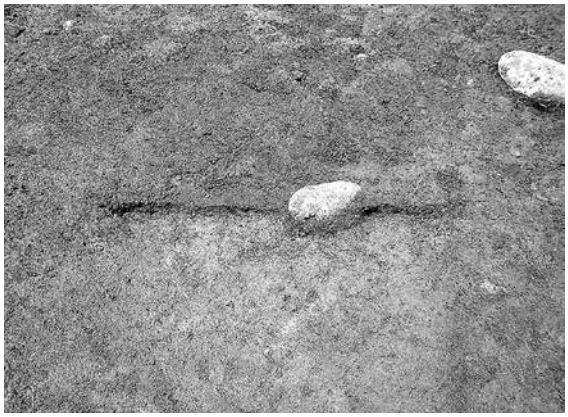
写真図版５

1　SK-1完堀状況（南より）

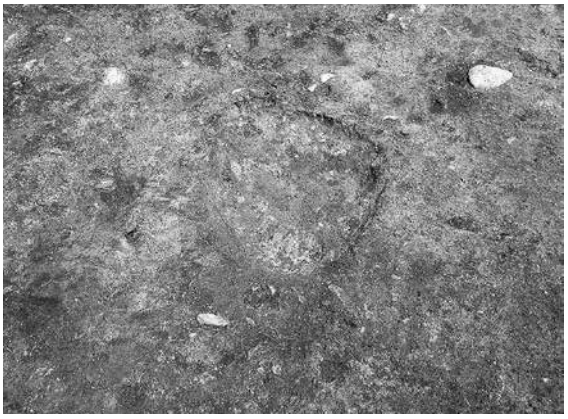


2　SK-1埋土断面（東より）

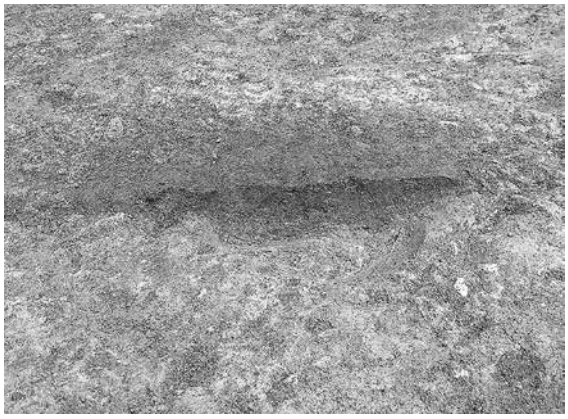
3　SK-2完堀状況（南より）



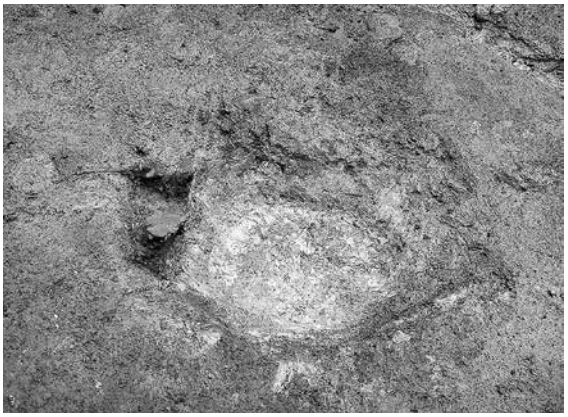
4　SK-2埋土断面（南より）



5　SK-3完堀状況（南より）



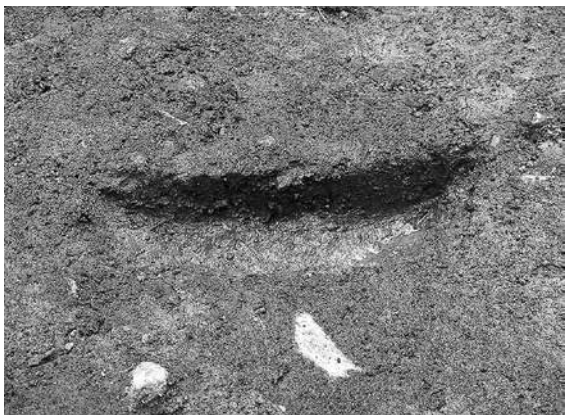
6　SK-3埋土断面（東より）



7　SK-4完堀状況（南より）

8　SK-4埋土断面（南より）

1　SP-1完堀状況（南より）



2　SP-1埋土断面（西より）

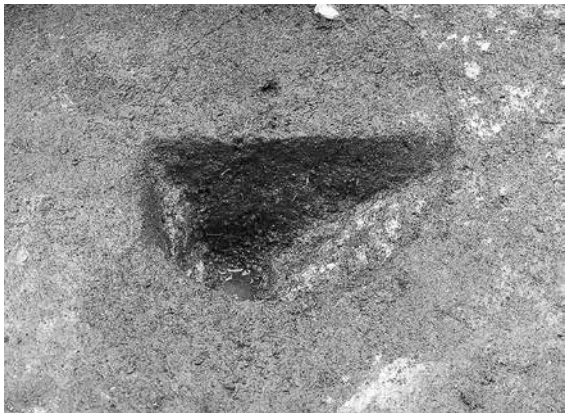
3　SP-2完堀状況（南より）

4　SP-2埋土断面（東より）

5　SP-3完堀状況（南より）

6　SP-3埋土断面（東より）

7　SP-4完堀状況（南西より）

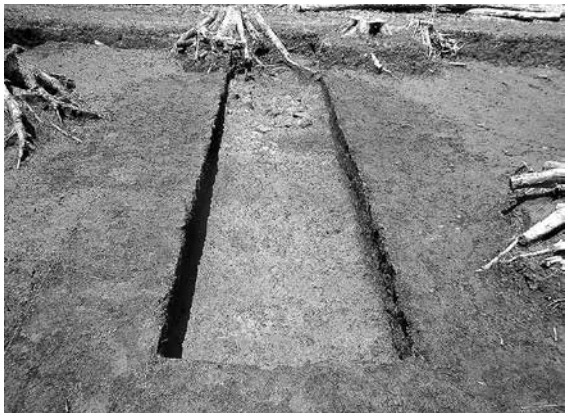


8　SP-4埋土断面（南より）

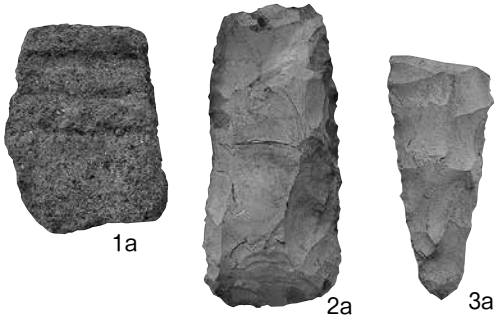
１　SD-1完堀状況（西より）

２　SD-1埋土断面（東より）

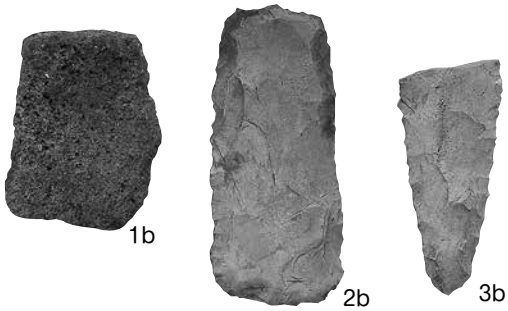
３　SD-1検出状況



４　西調査区最終確認掘り下げ状況（Ⅴ層まで）

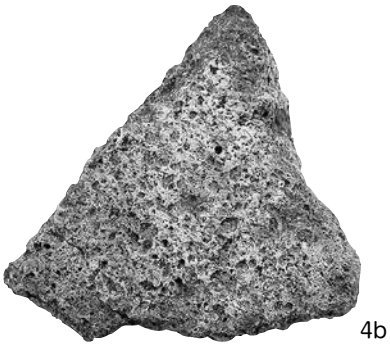


５　出土遺物　１（表）



６　出土遺物　１（裏）

７　出土遺物　２（表）



８　出土遺物　２（裏）

抄　　録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書
副書名	白山社及び駒形根神社
巻次	
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者名	菅原孝明・光井文行・阿部　充
編集機関	一関市教育委員会
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5　TEL0191-26-0820
発行年月日	2022年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむらしょうえん 骨寺村荘園	いちのせきしげんびちょうあざ 一関市厳美町字 こまがた 駒形1-1	03209	NE72- 2283	38°58′35″	140°56′55″	20210412 ～ 20210716	590㎡	確認調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
骨寺村荘園	荘園	縄文、近世、 近代	炭窯跡 土坑 柱穴 溝	縄文土器 石器	

要　約	令和３年度は、白山社及び駒形根神社のうち平泉野台地の南東端に位置する緩斜面を調査した。その結果、炭窯跡、土坑、柱穴、溝のほか、縄文土器片、石器を検出した。このうち炭窯跡は、遺物が伴わず正確な時期は不明であるが、形態などから近世以降のものと推定される。

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書

白山社及び駒形根神社

発　　行　　令和４年３月22日

発行・編集　　一関市教育委員会
〒021-8503
岩手県一関市竹山町7-5
電話　（0191）26-0820

印　　刷　　川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話　（0191）46-4161㈹